

花の集い

華やかな情緒を心ゆくまで 歌舞伎と日本舞踊の競演

当協会の上方文化芸能運営委員会は今年2月、「日本の文化に親しむ『花の集い』」を開催しました。前身の財団法人 上方文化芸能協会時代から約40年にわたり上方文化の伝承と振興に尽力してきた同委員会は、今年度で幕を下ろします。三部構成による歌舞伎と日本舞踊の競演は、その最後を飾るにふさわしい華々しい公演となりました。

2023年2月8日／国立文楽劇場

企画：阪口 純久

構成・振付：藤間 勤十郎

撮影：©越田 悟全

第一部 手打『七福神と花づくし』



▲京都祇園甲部芸妓の皆さん

江戸時代、京都・四条河原の芝居小屋のあたりに発祥した祇園新地で、芸妓衆が顔見世に来る役者たちを迎える際に手打を行ったことが始まりです。現在、芸妓たちが演じる「手打」は、明治時代に市川團十郎が京都で出演した際に行われたもの。揃いの黒紋付に、笹りんどうの紋の手拭いを小さく畳んで頭にのせた芸妓たちが、紫檀の拍子木をリズムカルに打ち鳴らしながら登場。その音頭によって、舞台上で三味線や笛、太鼓にあわせた唄や褒めことばで場を盛り上げます。

今回は京都祇園甲部のスター芸妓が勢ぞろいし、一斉に打たれた拍子木の響きは、賑々しく絢爛、かつ古風で雅やかでした。昔の京の顔見世の賑わいを彷彿とさせる出し物となりました。

第二部 長唄囃子連中『高杯』^{たかつき}

高杯とは、盃をのせる脚付きの台。花見に出かけた次郎冠者は、主人から高杯を買ってくるよう命じられましたが、高杯がどのようなものかを知りません。困った次郎冠者は「高杯買いましょう」と声を張り上げて歩き始めます。そこへ高足売り（高下駄を売る行商人）が現れ、言葉巧みにだまし下駄を売りつけるところが観客の笑いを誘いました。

初演は昭和8年、六代目尾上菊五郎が当時流行していたタップダンスの技法を取り入れ演じたもの。下駄でタップという趣向が楽しく、酔っ払って転げそうになりながらも巧みに下駄を操り、拍子を取って踊るさまは絶妙で最大の見せ場となりました。

▲松本幸四郎さん（次郎冠者）



第三部 極付 歌舞伎絵巻

『三番叟』

五穀豊穰を祈る日本古来の伝統芸能である三番叟を、二人で対をなしシンクロさせる楽しい舞踊。千歳の藤間勘十郎が息を合わせ、場を盛り上げました。



▲藤間勘十郎さん(右)と渡邊愛子さん(左)



▲左から、泉葵三照さん、坂東はつ花さん、藤間勘松音さん、花柳凜さん、若柳杏子さん

『阿国歌舞伎』

江戸時代、出雲大社の巫女出身といわれる阿国が京都で始めた舞踊劇。のちの歌舞伎芝居の始祖とされています。花びら舞い散る中、艶やかな五人衆が登場し、華やかな舞を披露しました。

『雪』

谷崎潤一郎の「細雪」にも描かれる地唄舞「雪」。銀屏風と燭台を座敷に設え、光量を抑えた舞台。和蠟燭の灯りがほのかに絹張りの傘より透けるのも趣を添えて幻想的でした。山村流の魂と舞手によって伝えられてきた静かな舞に、上方の魂を見る思いがしました。



▲山村光さん

『蜘蛛の糸』

能の『土蜘蛛』を元にした舞踊劇。源頼光にとりつき殺そうとする蜘蛛の精が狂言師に化けて現れ、三つの面での早変わりで見せ場となり、大きな拍手が沸き起こりました。そして、頼光と碓井貞光はこれを退治しようとしませんが、蜘蛛の精は千筋の糸を繰り出し攻撃します。最後は平井保昌も加わり、蜘蛛と武者たちが歌舞伎らしい豪快な大立ち回りで観客を魅了しました。



▲松本幸四郎さん

▼松本幸四郎さん(中央)、中村虎之介さん(右)、中村歌之助さん(左)



▲尾上右近さん

